



透明な海の下に並び並べてきた巨石海底建造物。潮気が薄く「サン」藻などの付着物が多く美しさが保たれてきた。沖縄県与那国町の新川島沖（水深110）で

巨石文明？眠る

階段やテラスのように見える直線の刻みが無数にあつた。青く澄んだ海をへぐり抜けた南国の陽光が、柔らかに降り注いでいた。

台湾を間近に望む日本最西端の与那国島（沖縄県与那国町）。周囲約二七〇の小島で十六年前、「巨石海底建造物」が発見された。それを見るため与那国島東南沖合約百メートルで、ダイビングを試みた。

二月半ばの南の海は水温二三度。すぐに水深二百メートルの底が見えた。世界有数の透明度と言われるのもうなずける。

与那国島①

海底に降りると、左右に城壁のような岩壁。土砂で埋まりかけた間をほうようにくぐった。

北上する黒潮が初めて日本にぶつかる海域。うかうかしているとき、体が押し流されるほど潮流は速い。そのせいか、岩壁にはサンゴや貝があまり付いていない。

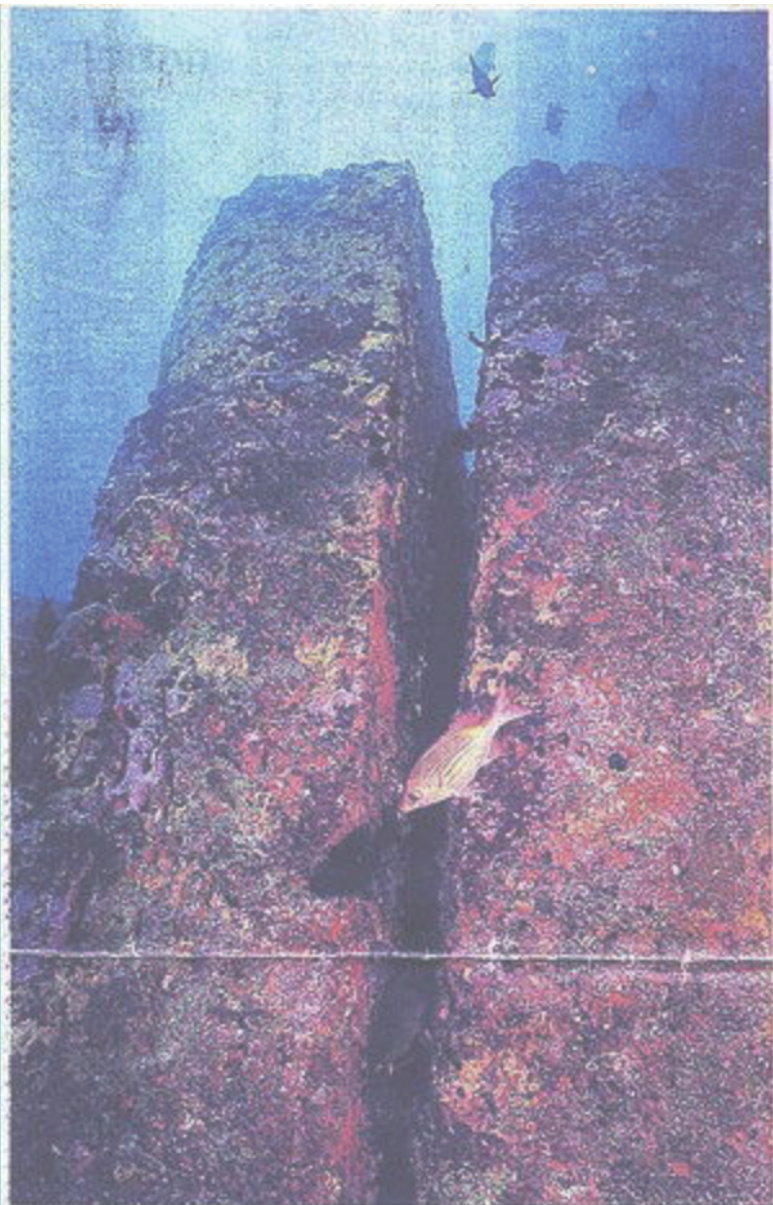


垂直の岩壁を回り込んで泳ぎ上がると、直線と平面が印象的なテラスのような場所に出た。岩陰から、神殿の祭壇をつかさどる神官が現れそんな錯覚を覚えた。

太平洋、オホーツク海、日本海、東シナ海。これらの海に大小約六千九百の島が浮かび、日本という国をつくらせている。大半は離島と呼ばれる小さな島だが、人が暮らす島は独自の自然、文化を持ち、一つの「島国」ともなっている。

「海」に抱かれ、国を「生み」、時に国の「眼」にほんろとされてきた島を各地に訪ねる。





高さ7m、厚さ1mの二枚岩。周りは平魚等の美しい魚が泳いでいます。沖縄県与那国町新川漁港（水深15m）で

与那国島②

写真・本田 政夫
文・宮本 隆彦

現地調査した琉球大の木村政昭教授は、岩壁の元素測定結果などから「約一万年前に造られ、氷河期以降の海面上昇で水没した遺跡」とする。

見える岩盤は、六十階建てのビルを横倒しにしたぐらいの大きさ。巨大さと整然とした存在感に、ロマンと想像力をかきたてられる。

人類最古ロマン

真ん中から一直線に切り割られたとしか見えない高さ7mの巨大な二枚岩が目の前にあった。

切断面はつるんとした平面。大きな丸のこで切ったよう。この造形物が海に沈んだ。遺跡だとすれば、幻の王国の石材加工技術力は驚くほど高い。二枚岩のすき間は今、魚の格好の隠れ家だ。

人の手が加わったように見えない。

古代人の手による遺跡か、自然作用の地形か。目の前にすると、鋭い直線とまっ平らな面に、人間の意思を感じずにはいられない。

のヒラミッドを超える人類最古の石の文明があったことになり、世界史は一変する。もちろん「岩石が直線的な節理に沿って割れただけ」と遺跡説に懐疑的な学者もいる。

巨石海底構造物立体図



編著・木村政昭琉球大学教授「与那国島海底遺跡」より



階段や側溝に見える正確な刻みの跡。人工か自然か—ダイバーの議論も熱くなる—沖縄県与那国町の新川島沖（水深7m）で



与那国島

③

与那国島では古くから、島のはるか南の海上に理想郷「ハイドナン」（南与那国島）があると信じられてきた。そこは税のない楽土。江戸時代、琉球王朝の過酷な人頭税に苦しんだ島民の中には、幻の楽土を目指して船出した者もいたという。海に眠る巨大な石の構造物とハイドナン伝説。「海底遺跡を残した古代王国が、ハイドナン伝説の源流になった」。そんなロマンを口にする島の人もいる。

理想郷を夢見て

楽土を夢想して南の海を見つめた島人が、その存在を知ったなら、水平線のかなたへの思いを一層かき立てられたのではないか。

島で初のダイビングショップを開き、潜水ポイントを探し回っているうちに石のテラスを見つけた新島八郎さん（宝島）は「一目見てソクっときた」と振り返る。

それから十六年。全国から多くのダイバーが島を訪れるようになった。「あれは人工物としか思えない」「いや、偶然の地形だ」。戻った船上で、タンクを下ろすのも、そこそこ議論が始まる。

「海底遺跡」であることを証明するため琉球大の調査チームは、先月二十六日から水中ロボットを使った再調査を進めている。

与那国島の海底遺跡調査に水中テレビロボットが導入された。二十八日午後、母船からの操作で二回にわたって海底遺跡近辺の水中を軽快に動き回り、光ファイバーのケーブルで地形画像を送った。水中テレビロボットは全長約一メートル、高さ約五十二センチで、最大深度は二五〇メートル。

与那国の海底遺跡調査

テレビロボット導入

母船でモニターを注視していた末村政昭琉球大学海底遺跡調査団長は、「今まで見られなかった深く遠いポイントの細かい観察が長時間できる。広範囲に地形の調査が可能で、新たな展開が期待できる」と、ロボット導入の効果を強調した。

古代の謎解きに最新技術

海底地形調査で高速潜航する水中テレビロボット
28日午後4時30分すぎ、与那国町新川
鼻沖、水深23メートル



観光資源へ広がる夢



古代へのロマンが広がる与那国の「海武遺跡」。今後、観光にどう生かすか

パネリスト

- 宮城 寛清氏 (県観光リゾート局 観光企画課長)
- 新嵩喜八郎氏 (与那国町観光協会 会長)
- 瓦本 隆久氏 (日本トランスオーシャン航空 営業部長)
- 稲泉 誠氏 (デジタルメディアファクトリー社長)
- 備瀬 憲男氏 (スキューバダイビングインストラクター)
- 木村 政昭氏 (琉球大学理学部物質地球科学科教授)

コーディネーター

小浜 哲氏 (名城大学国際学部 観光産業学科教授)



稲泉 誠氏

循環の仕組み必要

小浜 どういうプレゼンテーションが必要か。稲泉 素材の一つとしてはいろいろあるが、今あてとるべきは、与那国を売るやり方、情報を整理して発信する。そして物理的なものをつくる。実物

大の模型を造ったらすごいと思う。地域の資源を掘り下げる必要。観光資源として行政が取り組み、民間がデザイン化、商品化して循環させる仕組みが必要だと思う。

備瀬 受け入れ態勢には問題がある。船やスタッフの問題。百人、五百人送客した場合、どうなのか。港湾整備の問題もある。現状の受け入れ部

分を踏まえた上で、長期ビジョンを持たないといけない。



瓦本 隆久氏

さらに魅力アップ

稲泉 宝の山という感じがする。与那国に限らず、地域の文化は住んでいる人がなかなか気付かず、外の人が再発見する。まず、学術的に徹底的に調査してロマンを深めることが必要。また、海底遺跡は観光資源そのもの。それをどうデザインし、商品化するかも重要だと思う。保護についても考えないといけない。

国内外でアピール

小浜 最初に「海底遺 光行政としても関心を 査結果を基にモニタリーになるを期待している。跡」のかわり、思い 持っている。〇〇の年 ツアー、県民の意識高揚 与那国だけでなく八重 構造物であることを県民 光資源を活用し、デジタル について話してほしい。 度から二年間、新たな観 に取り組んできた。海底 山、沖縄全体の新たな観 が認識し、観光の目玉と ルアーカイブをつくって なるよう、保護にも力を はごうか。二つ目、道 の駅のような「海の駅」 入れてほしい。



宮城 寛清氏

新島 十五、十六年前 たい、潜りたいという気 アム」を那覇に造ってほ 持ちをどう起こさるか しい。

めたい。

拓出、海底遺跡に出合っ ヤン航空も、ボスターや ホームページで紹介する アルファとして、その道 具を使い、地域の文化を 情報発信することが重 要。沖縄は観光マーケッ トが大きい。付加価値を 上げるため、IT（情報 技術）という道具を使っ て観光マーケットを広げ たい。

福泉 三つの提案があ る。海底遺跡は過去か 技術」という道具を使っ て観光マーケットを広げ たい。

自然のものであれ人工の へ、ということだと思っ てほしい。



小浜 哲氏

小浜 海底遺跡には幽 うプレゼンテーションし 人が来たとき日帰りで 値がある。価値をどう演 出するか。まずは知的好奇心を 喚起する。 出さるから議論が整理さ かっていく。 いろいろな 喚起するか。 知ら 増える。 与那国の人 は 方向性があり、どう選 択 ない人という知らしめる 滞在の快適性をいかに向 するか、が指摘された。 か、そのコストは誰が負 担するか。 その魅力を使って今後ど 担するか。

価値をどう演出し 好奇心喚起するか

ただと思われたら、観光客は一度と来ない。

陸上生活の自然と文化は観光の要素。それに加えてここにしかない文化が加わった。沖縄観光は、陸上の自然、文化に加えて海の中の自然・文化も取り上げられる。そのマーケットをこれから大きくする活動は必要だ。

ダイビングができる人は限られている。広く知らせるには、違うツールを考えないといけない。お年寄りの子どもにも、体の不自由な人にも、いかにも自分が海の中にいるかのような雰囲気をつくって、海底遺跡や海の自然、文化を見せることも、私たちに課せられた義務だと思う。

遺跡の実物大模型 陸上へ設置しては



備瀬 憲男氏

小浜 価値をどう演出するか。まずは知的好奇心を喚起する。 出さるから議論が整理さ かっていく。 いろいろな 喚起するか。 知ら 増える。 与那国の人 は 方向性があり、どう選 択 ない人という知らしめる 滞在の快適性をいかに向 するか、が指摘された。 か、そのコストは誰が負 担するか。 その魅力を使って今後ど 担するか。

小浜 価値をどう演出するか。まずは知的好奇心を喚起する。出さるから議論が整理さかっていく。いろいろな喚起するか。知らない人という知らしめる滞在の快適性をいかに向するか、が指摘された。か、そのコストは誰が負担するか。その魅力を使って今後ど担するか。

小浜 価値をどう演出するか。まずは知的好奇心を喚起する。出さるから議論が整理さかっていく。いろいろな喚起するか。知らない人という知らしめる滞在の快適性をいかに向するか、が指摘された。か、そのコストは誰が負担するか。その魅力を使って今後ど担するか。

基調講演

母那国の海底三〇層あるいは四〇層のところ、昔人が住んでいた都市が沈んでいるらしいというのが、あるダイバーの発見で分かった。本当に海底に「遺跡」が

線刻画にアーチ門も

木村政昭琉大教授



九四年に調査に入つて、昔高い所からシラミツド船になつていて、周りにループ道路のような道がある、出のようなレリーフがある、アーチ状の入り口もある。現在の海底でこういう地形があるを、とも思えない。マヌコミでも報道され、「海底遺跡」説がついては、賛否論がある。

海底でこういう地形がある。そして、とも思えない。マヌコミでも報道され、「海底遺跡」説がついては、賛否論がある。

眼教育委員会は史料編集要「母那国遺跡遺跡説批判」を出している。この二十三塚にわたる論文の中で、五から批判している。

一つは遺跡ポイントについて、加工の跡がない。クサビ穴は自然にできている。構造が極めて不規則で、対照的なものがない。それから宗教的、政治的といった目的意図がなく、装飾品がないといっている。論では「自然の地形物だと確信している」といながら、その根拠は「自然の地形物としての論議はしていないのに、なぜ自然だと断定できるのか。しかし、たれも抱く疑問である」とは言う。これを踏まえて、話をしたい。

切取った石などを固定して来た結果、六十年より以前にできたという方向で考えられている。六千年前から二千年前に陸上にあつたとは明らか。それが何年前かを調査するためにやっている。

石版に線刻画のようなものも出た。首飾に似たアーチ門もある。装飾的なものがないといっているが、カヌエをものが多い。六の首飾もあるが、ものもあつた。フィンクスのものもある。断片は、出なる海底の断片構造ではなく、対称性がある。

今後、これがどのように活用されるか、という段階に入っている。いすれにしても「海底遺跡」がないと認めないといっている。

保護に力を入れて



新嵩 喜八郎氏



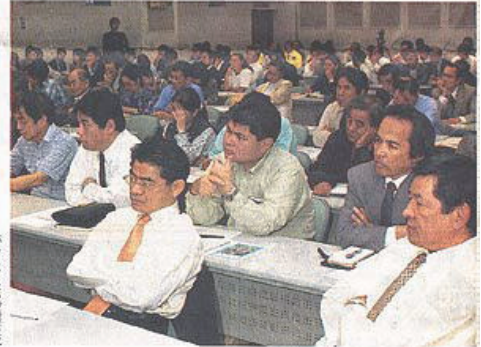
備瀬 遺跡だけでなく、ハンマーヘッドといふサメの出合いも多く、ダイビングを中心とする観光資源として大きな期待が寄せられている。ダイバーの家族やエイリングのできない人のために、母那国の資源をどう活用するか、という形を生かすか、リーフ内をシュノーケリングとか、ハワイのオアフマ海にも勝るとも思ふ。シーカレンドでも母那国は楽しめる。

備瀬 遺跡だけでなく、沖きないか考えている。持ちを起させること、小浜、母那国としてポイント。母那国は立地、海況、交通、観光、環境、歴史、文化、産業など様々な資源がある。それをどう活用するか、という問題がある。それをどう活用するか、という問題がある。

備瀬 遺跡だけでなく、沖きないか考えている。持ちを起させること、小浜、母那国としてポイント。母那国は立地、海況、交通、観光、環境、歴史、文化、産業など様々な資源がある。それをどう活用するか、という問題がある。それをどう活用するか、という問題がある。



琉大は1997年から本格的に「海底遺跡」の調査に乗り出した



会場との質疑
文化財指定
議会で論議

パナソニックの調査に際して、調査への思いを伝える。調査の目的、調査の経緯、調査の結果、調査の今後の展望などについて、質疑応答が行われた。

文化財指定
議会で論議

文化財指定の議論が、議会で論議された。文化財指定の重要性、調査の結果、調査の今後の展望などについて、議論が行われた。

与那国町議会

空港滑走路
延長事業

「棚上げ」撤回、東側延長

石垣へのセリ輸送費を半額補助

「海底遺跡」の保護条例制定へ



我那覇武氏

【与那国】開会中の三月定例町議会(外間俊章議長)は二十七日、初回の一般質問を行い、我那覇武氏(無所属、自派)が、大宜見浩利(同)の三氏が登壇した。大宜見氏は、町議協賛した下杉訴訟事件の史料を、昨年十二月から



我那覇武氏

島内をセリが行われなくなるとともに、狂牛病の風評被害でセリ値が落ちていることを救済の上げ、尾辻町長は石垣市内でのセリに参加するために畜産農家が負担している一頭当たり六千円の輸送費のうち、半額を補助していく考えを示した。



大宜見浩利氏

与那国空港滑走路の延長事業では、尾辻町長が昨年十二月定例会で「一時棚上げ」の考えを示したことについて我那覇氏が質問。尾辻町長は、県との調整の結果、滑走路を東側に延ばしていくことになったとの考えを示し、二〇〇六年度

取り、救済方法を検討している。

大宜見 石垣市内で行われるセリに出向するため、運賃はどのくらいか。

尾辻町長 価格が元に戻るまでの間、一頭当たり六千円の自己負担分のうち、半額を補助したい。

大宜見 町として行えることはないか。

尾辻町長 価格が元に戻るとの間、一頭当たり六千円の自己負担分のうち、半額を補助したい。

空港滑走路延長事業

我那覇氏 尾辻町長は昨年の十二月定例会で「一時棚上げ」と答弁した。施設方針では、それ以前の計画通りに、「平成十八(二〇〇六)年度の供用開始」としている。これまでの経過を知らぬか。

尾辻町長 一月九日に町議入ととも、県と調整しながら、「今」棚上げ」と

いう言葉を使うと、熱気が離れなくなる」と指摘された。県とは二月にも再議論した。滑走路延長は町民の期望だ。議会の理解を得ながら、予定の年数で実現するよう努力したい。

我那覇 東向きに近接することについてか。

尾辻町長 県と結んだ結果でも、今計画している方法を進めさせていたたたきという話だった。

我那覇 (西向きに延長を計画していた)九五年度時に用地提供に同意した地権者が、その用地の買い入れを申し出た場合にとる取り組むのか。

尾辻町長 町と県と協議し、解決に向けて最大限努力する。二千に滑走路の突進のために、政治生命をかけて解決に取り組むたい。

「海底遺跡」

我那覇 「海底遺跡」が石が持ち込まれたら、ハ

ンマーで壊されたりするところがあるようだ。

尾辻町長 「海底遺跡」は町の観光にとってなくてはならない観光資源だ。県知事も「世界遺産」に登録したいと興味を持っている。町教委に協力して条例を作り、守ってほしい。

杉本和章町教育総務課長 「海底遺跡」が破壊されては困る。文化財保護法でできれば、やめてほしい。(条例制定には)前向きに検討したい。

我那覇 「海底遺跡」に関する観光人数を知りたい。

与那覇仁二商工観光課長 補佐 本年度見込みで、ダイバーが一万五千人、グラスボート利用者二千八

指示板の設置

暗黒孫古 県道とに指示板を設置し、町民の利便性を向上してほしい。

尾辻町長 取り組むたい。

2002/4/6

海底遺跡を守ろう／上／山田文比古／「水中遺産」保護条例を

与那国島の沖合にある「海底遺跡」が発見されて、十年近くが経過しようとしている。この間ダイビング雑誌やテレビの特集番組等で度々紹介された結果、多くのダイバーや観光客が押し寄せていると聞く。そのこと自体は、地元の振興につながる事なので大変結構なことと思うが、訪れる人々の中には時に不心得者がいて、「遺跡」の一部を叩き割り、サンプルとして持ち出したというケースも報告されている。こうした無秩序状態が続けば、せっかくの文化遺産が台無しになってしまうことが懸念される。何らかの保護と規制の枠組みを整備し、そうした取り組みを通じながら観光資源としての活用も図っていく、ということが考えられないか。こうした問題意識は以前から一部の関係者には認識されていたが、具体的な解決策にはたどり着いていないのが実情である。そのネックになっているのは、「海底遺跡」が本当に「遺跡」と認定できるのかということについて、文化行政当局や識者の理解を得られていないことである。文化財保護法に定める「遺跡」として認定できなければ、保護や規制の根拠がなく、従って何ともしようがない、ということなのであろう。あれが人工物である、あるいは少なくとも自然物でないということについては、いまや異議を唱える人はいないと思う。この点については木村琉球大学教授が既に明確に答えを出している。では、あの水中の人工物が「遺跡」と言えるか、と問われれば、少なくとも現行の文化財保護法の定義上は難しそうだ、と言わざるを得ない。文化財保護法は何十年も前に作られたもので、最近の科学技術の発達の成果として発見されてきた事実、例えば与那国の「海底遺跡」のようなものは全く想定されていないのである。文化行政当局者の戸惑いも分からないではない。であれば、現行法という土俵で戦ってもあまり意味がない。むしろ、新たな状況に対応した新たな法令を制定し、新たな枠組みを作ればよいのではないか。言うまでもなく、地方自治体には条例制定権が認められている。国がやらないのなら、自治体の方でやればよい、という考え方はできないか。ズバリ申し上げると、私は、沖縄県ないし地元自治体が水中文化遺産保護条例を制定することを提唱したい。今回の本稿において、それが決して荒唐無稽（こうとうむけい）な話ではないことを説明したい。（元沖縄県サミット推進事務局長）

2002/4/7

海底遺跡を守ろう（下）／山田文比古／保護し観光に活用を

前回の本稿において、私は、沖縄県ないし地元自治体において、沖縄の海底にある文化遺産を保護する枠組みを条例として制定してはどうかということを提唱した。与那国だけではなく、沖縄の島々の周りには、不思議な海底地形が眠っていることが既に知られている。二万年前の南西諸島は中国大陸と日本列島とを結ぶ陸橋としてつながっていたのである。海底に何らかの人類の痕跡がない訳がない。誰が見ても明らかな人工物が海底で見つかった場合には、当面それが文化財保護法の定義からは遺跡と断定できない段階でも、きちんと保護し学術的な研究の対象とするだけでなく、規制をしながら観光資源として活用していくことが重要である。沖縄の周りの海中にある沖縄特有の文化遺産を、沖縄の人々が独自の立場から認定し、守っていくシステムを沖縄自身が作っていくことは当然のことではないか。国が何もしていない領域であるから、白いキャンパスの上に好きな絵を描くように、全く新しい発想で条例を作ればよい。こういうことを言うと、何か突拍子もないことをあおっているようにも聞こえるが、実は水中にある文化遺産を守っていくという動きは、国際的には既に相当進んでいるのである。昨年十一月、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は「水中文化遺産保護条約」を総会での多数決で採択した。この条約は、「百年以上水中にあった、文化的、歴史的、考古学的な、人間存在の痕跡」を「水中文化遺産」と定義し、具体例として「考古学的、自然的背景を有する遺跡、構築物、建造物、人工物」や「先史学的性質を有する物件」などを挙げている。最近の海洋科学の発達により世界各地で発見されつつあるこれらの水中文化遺産を、人類の文化遺産として幅広く保護するとともに、保護と両立させながら「教育上、娯楽上の恩恵に浴する公衆の権利」も追求していこうとするもので、基本的に本稿で述べてきた方向性と軌を一にするものと言える。ここでは、水中にある文化遺産を狭義の遺跡より広く定義していることが注目される。この条約が各国の批准により発効するにはまだ時間がかかると言われているが、沖縄の海底にある文化遺産については、もはや一刻の猶予も許されない。この条約の定める水中文化遺産の定義やその保護の方法を、いわば先取りする形で積極的に取り入れ、条例化してはどうだろうか。沖縄県民の先見性と国際性を如実に示すことになると思うのだが。（元沖縄県サミット推進事務局長）

与那国海底遺跡説批判

与那国海底遺跡説批判

考古学の視点から

(2) 安里 嗣淳

陸地沈降の証拠なし

時代とも合わない文明論

木村氏は当初、この海底「遺跡」の推定年代を約四千年前から約二千四百年前だとしていた。すると「遺跡」が水没したのは二千四百年前よりも新しい時代であり、一帯に陸地の部分の沈降を不十分があるはずである。しかし、木村氏も認めるようにそれは未発見である。

ここで強調しておくが、陸地の沈降はあくまでも部分的である。木村氏は当初、この海底「遺跡」の推定年代を約四千年前から約二千四百年前だとしていた。すると「遺跡」が水没したのは二千四百年前よりも新しい時代であり、一帯に陸地の部分の沈降を不十分があるはずである。しかし、木村氏も認めるようにそれは未発見である。

それでは逆に、海面が上昇したと考えることは可能だろうか。それもまた否である。なぜならば、海底「遺跡」と時代が異なる(このことには)波照間島下田原遺跡、石垣島大田

のほとんどが旧石器時代の後期にある。そのうちのある時期には海面が現在よりもかなり低い時期があったことは定説となっており、与那国海底遺跡の位置が陸上にあったこともあろう。また、この遺跡が現在の海面よりも低い場所、かなり古い時期の人類遺跡が存在している可能性は、とくに与那国近海に限らず世界的

ならない。なぜならば、約二千年前以降も島の北海岸巨川トウアル遺跡が存在しているが、それは現在の海面とほぼ同等の陸地にあって、この遺跡の時期から海面はほとんど動いていないことがわかる。すなわち、海底「遺跡」一帯は新石器時代以降、局全体が沈降してしまっただけというわけではないのである。

さて、以上のような批判は木村氏が「遺跡」の推定年代を約四千年前、二千四百年前に設定したことに對するものである。つまり四、二千四百年前は現在の海面とほとんど同じな

に広い範囲で期待できる。しかしここには重要な問題がある。考古学的な研究がなかった、旧石器時代とされるものと、当時の原始人は何れよって、石垣は打ち欠いて造っただけの打製石器で、技術段階としては低い。社会構造も技術段階も低く、自然の再生能力の範囲に乏しい。そういう段階の旧石器時代、ある程度組織的に発達した社会のみ出現する。巨大な建造物が存在することは考えられないのである。



別荘が現在も進行中のテラス状地形＝与那国島サンニヌ台

木村氏の一部に神像などを想定しているが、移動をくりかえし、狩猟採集を主とする生活スタイルのなかで、いったい何者が不動像としての神像を造るのだからか。古代の巨大な石造物は通常その社会の権力者の象徴を不示すものとして、あるいは宗教的願望や儀礼の権威を表すものとして行われる。旧石器時代から社会的に組織されていたであろうか。否である。このような巨大な建造物が人工だとすれば、それは新石器時代以降の定住社会にしか見えない。

与那国海底遺跡説批判

考古学の視点から

(1)



安里 嗣淳

成り立たぬ人工説

木村教授の見解は疑問

形であって、人間による造作物ではないと考えている。すでに私は木村氏に招かれて

いるうちに世間で定着してきて、一般に海底遺跡の存在が考古学界でも認知されているかのように誤解されかねない。考古学者も、学界内部だけで「実はあれは造られたものだとましているわけにはいかなさうな。考古学研究の成果に照らしてこれを検証し、その評価について広く社会に対しても表明

り立たないことを論じていきたい。海底「遺跡」の特徴 まずはじめに、この海底「遺跡」を仮に人工とした場合、その特徴は何かということを確認したい。第一に、それは海底に横たわる自然の基盤石(大石)への、人間の「造作」であ

現在水中にあるが、かつて陸上にあつた時に、陸上に住む人間によって建造され、利用されていた、そしてある時期に陸地の沈降または海面の上昇によって、海面下に没したということではなければならない。

工説(遺跡説)を否定するものとして、当時の海面上昇、陸地沈降の可能性の問題も含めて、両者が整合性をもつかどうかを検証する。

またこの巨大な石塊に、人間による造形作業過程を示す痕跡が見いだせるのか、あるいは完成物に人工物としての規則性、対称性あるいは文化的造形などの人間社会特有の特徴が表現されているのかを検討したい。

さらに、このような類の「石造物文化」が与那国島や八重山諸島、そして海外周辺地域に存在するのかが検証したい。人間集団の生み出す物質文化は、天から降って湧いたように出現し、突然と消滅するものではない。それを生み出した前史と影響を受ける文化の広がりがあるはずである。(日本考古学会会員)

与那国島南海岸地先の海面の下にある、クテ・ヨコが平坦な面になっている巨大な岩は、人間が造った大昔の建造物であるという琉球大学の木村政昭教授らの海底遺跡説が、いろいろなメディアを通して紹介される。私は考古学の立場から、この海底「遺跡」なるものは自然の造

参加したシンポジウムでこれを批判し、あるいは技術誌にも一度にわたって批判論文を発表している。しかし学界での地味な活動であることから、世間にはほとんど知られていないように思ふ。

一方、木村氏の海底遺跡説は、メディアで何度も扱われて

すべきたと考えた次第である。木村氏が真に「海底遺跡」の科学的解明を望んでいることはよく承知している。木村氏からは調査への参加に声をかけていたが、著作の専写を受けたらしてはいるが、その情熱と敬意に敬意と感謝を示しつつも、残念ながら海底遺跡説は成



別荘が現在も進行中のテラス状地形＝与那国島サンニヌ台

ただけの打製石器で、技術段階としては低い。社会構造も技術段階も低く、自然の再生能力の範囲に乏しい。そういう段階の旧石器時代、ある程度組織的に発達した社会のみ出現する。巨大な建造物が存在することは考えられないのである。

木村氏の一部に神像などを想定しているが、移動をくりかえし、狩猟採集を主とする生活スタイルのなかで、いったい何者が不動像としての神像を造るのだからか。古代の巨大な石造物は通常その社会の権力者の象徴を不示すものとして、あるいは宗教的願望や儀礼の権威を表すものとして行われる。旧石器時代から社会的に組織されていたであろうか。否である。このような巨大な建造物が人工だとすれば、それは新石器時代以降の定住社会にしか見えない。

与那国海底遺跡説批判

考古学の視点から

安里 嗣淳

(4)

文化様相と大きく矛盾 周辺に発達した文明なし

木村氏は、当初は与那国海
底「遺跡」に付着したサンゴ類
による年代測定値を参考に
して、遺跡の年代を約四千二
千四百年前と推定している。こ
の年代の幅は、八重山先
史時代（新石器時代）の前期に
あたる。すなわち、琉球列島の
下田原遺跡から与那国島のト
リダ遺跡の時代にかけて

らんでしまっているのである。その矛
盾からも、この「遺跡」は人工
ではありえないということが言
えるのである。すなわち、人間
の作りだす文化は単独で、近隣
とのかわりもなく成立する
ものではないはずである。ま
た、前後の時代に何の跡もな
く突然から降って湧いたよう
に出現し、しかも後の時代に突
然消失したのではない。

の時代にもまったく存在しない
し、その物質文化の伝説の片鱗
も残されていない。仮にこのよ
うな石造文化は存在していたら
ならぬ、それが出現しなかった
当時の社会のさまざまなことが
らも推察し、せめて口頭伝承と
しても残されていそうなもの
であるが、それさえも確認され
ていない。このことから、海

に区分される。一つは奄美・沖
縄諸島を範囲とする北琉球文化
圏で、もう一つは宮古・八重山
諸島を範囲とする南琉球文化
圏である。また南琉球圏の具体的
系譜はつかぬが、石器・土
器・貝器文化の内容からみま
ると、東南アジアに類似性をも
っている。したがって、石造文化
を論ずる場合、南琉球文化圏

与那国海底遺跡説批判

考古学の視点から

(3)

安里 嗣淳

見つからない加工痕 非合理的構造に満ちた形状

私は海底「遺跡」付近の海岸
の観察をしたが、実際に潜
ってみたいとはいえない。しかし、
幸いにも調査団が詳細な映像や
採取の図や大規模な断面の
情報を提供している。ある程度
のことば間接的に観察すること
ができる。これらの情報をもと
に、調査者も言っ
ていることはあるが、明確な加
工痕はみられない。

また、その加工具（おそく
石器）や削られた断面も発見さ
れていない。木村氏は巨岩のな
かに、クサシを打ち込んで強
ためのクサシ穴が連続的に設け
られていると指摘している。しか
し、この連続穴群はあくのサン
ゴと見られる陸上の巨岩器

建造物の多くは、その部分なり
全体なりを中心線から縦方向、
あるいは横方向に二分できる対
称形構造をもっていることが多
い。確かにこの海底「遺跡」に
は直線構造が随所に見られ、い
かにも人間による加工の雰囲気
を漂わせている。しかし、そ
れは部分的な形状からくる印象で

構造物の形態や構成に「見せ
る」あるいは「表現する」こと
を意図した形や装飾などの文化
的な造形が見られないことも
遺跡としての要件を欠いている
といふべきである。これほどの
巨大な規模の建造物ならば、例
えば宗教的願望・権威、または
政治的権威を演出する装飾とし

て、あるいは集団（社会）の習
俗の表現としてかなり強い意図
が働いているはずである。
ところが、全体構成をみると
巨大な断面を造作できただけの
技術をもたないから、その構造は
なんとも稚拙というべきであ
る。すなわち製作者の「意図」
がつかぬのである。遺跡説
の主張者が権威をこゝ推定する



連続穴群のある岩。こういうのが海
底にあると遺跡にみえる？
＝与那国島サンゴ台



自然がつくった地形。溝状に深く
削られた巨岩＝与那国島サンゴ台

段々も建造できなかったのでは
ある。周知のように、階段は高さ、
幅が一定の割合で連続していな
いと、歩行に不調和をもたら
される。遺跡説主張者が階段と推定
された箇所は、段差が不規則に連
なっている。これでは歩行者に
とっては不規則に起伏する山道
と同じである。

自然にできた段差構造
要するにこれは自然にできた
段差構造なのであって、高度な
技術をもった集団の営為ではな
い。また、他の面を見ても精緻
な面形成技術もなから、破
断はまったくとされてない。貧
弱な造形といふべきである。ど
こを見ても人間集団の造作の痕
跡や、規則性、文化性は確認で
きないのである。これでは組織
された人間社会において、この
構造物を「見せる」ことによっ
て期待される人民の驚嘆、支配
者または権威者への畏怖の念は
望めないであろう。

いつい、この海底の巨岩は
何なのか。これは単純である。
この「遺跡」は自然地形として
巨大な水平面・垂直面をもち、
しかもそれが直角になっている
。事実をそれだけである。人
工的な遺跡だと見るのはまさに
この点の「理解のしかた」の相
違であり、この域を出るもので
はない。「このような大規模な
面形成の巨岩は、とても自然の
造形とは思えない、人工としか
考えられない」といって、印象的
な主張にすぎないのである。
(日本考古学協会会員)

代は、沖縄諸島ではグスク時
代、八重山諸島は「スク時代」
と称されている。

この時代の遺跡のひとつ、与
那国島の内陸部の高台地に形
成されている。一つの巨岩を掘
られた構造は、非対称に折れる形
をとっている。しかし、石造構築物
はまったく検出されなかった。

ほぼ同時期、およびそれ以降
の豊田崎遺跡や島内の他の類似
遺跡も同様である。考古学的に
はグスク時代と称されるこの時
代の琉球列島には、沖縄島を中
心に高台に石垣積みの特徴とな
り、グスクが築かれていた。しか
し、この時期の与那国島には、近
隣地域の石造構築物に類似する
物さえも存在しないのである。

与那国島では、スク時代に至っ
ても石造文化はそれほど発達し
なかつたと言え、要するに、
新石器時代はあくが、十四世紀
頃までは、与那国島には石造建
造物の文化は存在しなかったの
である。(日本考古学協会会員)

人件、崩壊などは発見されて
いない。

また、巨岩や巨岩を加工した
遺構、あるいは石垣、石列など
の石組み遺構はまったく存在し
ない。

琉球列島のほとんどの地域と
同じように、与那国島でも鉄
十二・三世紀の頃から農耕や鉄
器の使用が普及し、外部との交
渉も展開されるようになったも
のと考えられている。しかも
のと考えられている。生畜経済
の進展につれて、社会的に階
級社会が形成されていき、各地
に酋長層が集落を支配していた
ものと考えられている。この時

与那国島の先史文化
与那国島の新石器時代遺跡と
しては、空野の東洲跡がある
トウケル遺跡がある。海岸に
の日常生産の主な道具は石器
で、かなりの数の台車も出土
している。ある程度のまとまった
集団の形成はつかえるが、順
始共同体の段階にあって、階級
社会にみられるような権力の集
団としての階級構造（酋長など）
他（反別された特別扱いの奴

<1> 平成14年(2002年)5月14日(火曜日)

創刊号(1996年6月)以来日誌出版(毎月1日) 第2047号

復帰30周年記念
沖縄特集号

自由民主
LIBERAL & DEMOCRATIC



発行所
自由民主党本部
東京都千代田区本町1-11-23
電話 東京 03(258)3431(代番)
編集局 東京03(3)2-1953
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
<特選火曜日発行>

日誌記事更新ホームページ URL <http://www.jmin.jp/>

祝 沖縄復帰30周年

世界へ羽ばたけ! 「沖縄の心」

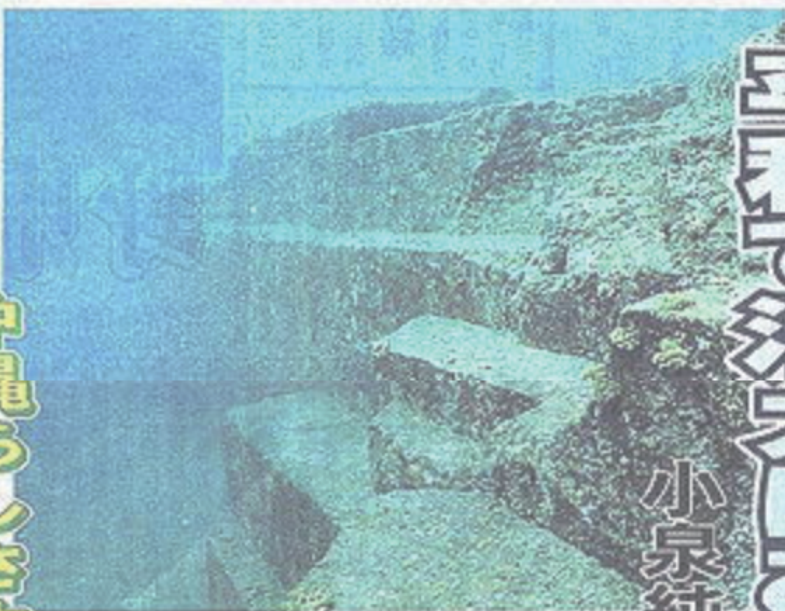


対談
野中広務 党沖縄振興委員長
稲嶺恵一 沖縄県知事

〈2、3面〉

沖縄らしき生かし未来へ

復帰30周年を前に、復帰30周年の歴史を振り返り、今後の沖縄の発展に向けて、野中広務委員長と稲嶺恵一知事との対談が掲載されている。復帰30周年の歴史を振り返り、今後の沖縄の発展に向けて、野中広務委員長と稲嶺恵一知事との対談が掲載されている。



平和で活力にあふれた沖縄を

小泉純一郎総理メッセージ



小泉純一郎です。
本年は沖縄の本土復帰30周年という記念すべき節目の年です。沖縄復興に向けたこれまでの様々な取り組みにより、三十年間で社会資本や生活環境の整備等が大きく前進しました。新しい時代を迎えて、沖縄の一番の自立発展の鍵は豊かな住民生活の実現にあり、かなければなりません。今国会で成立した沖縄振興特別措置法を活用し、沖縄の特性を活かした産業振興や人材育成などに積極的に取り組んでまいります。
在沖米軍は、わが国のみならずアジア、太平洋地域の平和と安定に大きく貢献する一方で、基地の存在は、沖縄の皆さまに大きな負担を与えています。沖縄に関する特別行動委員会（SACO）最終報告の着実な実施を通じて、その整理・統合・縮小に向けて取り組むなど、沖縄県民の負担軽減に向けた努力を継続してまいります。平和で活力にあふれた二十一世紀の沖縄の実現に向けて、今後とも全力で取り組んでまいります。



沖縄特集

- 12.11.9 面 野中広務委員長と稲嶺恵一知事との対談
- 8 面 私が心掛ける「元氣人」で
- 6、7 面 特別企画
- 2、3 面 六対談 野中広務委員長と稲嶺恵一知事との対談
- 1 面 特別企画

「海底遺跡の眠る与那国」世界にPR



「元気人」です

観光資源探索中に歴史的発見をした

あるだけ「あー、はー、あー」
新着喜八郎さん (沖縄県 与那国島)

日本経済新聞、沖縄県、与那国島で「あーあー」のなぞの発見を報告後、世界中に「新着喜八郎」をブレイクさせた。2001年11月、新着喜八郎さん(右)とジャック・マイヨールさん(左)は、与那国島で「あーあー」のなぞの発見をした。2001年11月、新着喜八郎さん(右)とジャック・マイヨールさん(左)は、与那国島で「あーあー」のなぞの発見をした。

1万年も前の建造物



世界に名を馳せたジャック・マイヨールさん(左)と新着喜八郎さん(右)

「あーあー」のなぞの発見は、世界に名を馳せたジャック・マイヨールさん(左)と新着喜八郎さん(右)の発見による。2001年11月、新着喜八郎さん(右)とジャック・マイヨールさん(左)は、与那国島で「あーあー」のなぞの発見をした。

新着喜八郎さん(右)は、2001年11月、新着喜八郎さん(右)とジャック・マイヨールさん(左)は、与那国島で「あーあー」のなぞの発見をした。



与那国島の海底に眠る「あーあー」の遺跡

「あーあー」のなぞの発見は、世界に名を馳せたジャック・マイヨールさん(左)と新着喜八郎さん(右)の発見による。2001年11月、新着喜八郎さん(右)とジャック・マイヨールさん(左)は、与那国島で「あーあー」のなぞの発見をした。

「あーあー」のなぞの発見は、世界に名を馳せたジャック・マイヨールさん(左)と新着喜八郎さん(右)の発見による。2001年11月、新着喜八郎さん(右)とジャック・マイヨールさん(左)は、与那国島で「あーあー」のなぞの発見をした。

「あーあー」のなぞの発見は、世界に名を馳せたジャック・マイヨールさん(左)と新着喜八郎さん(右)の発見による。2001年11月、新着喜八郎さん(右)とジャック・マイヨールさん(左)は、与那国島で「あーあー」のなぞの発見をした。

「あーあー」のなぞの発見は、世界に名を馳せたジャック・マイヨールさん(左)と新着喜八郎さん(右)の発見による。2001年11月、新着喜八郎さん(右)とジャック・マイヨールさん(左)は、与那国島で「あーあー」のなぞの発見をした。

「あーあー」のなぞの発見は、世界に名を馳せたジャック・マイヨールさん(左)と新着喜八郎さん(右)の発見による。2001年11月、新着喜八郎さん(右)とジャック・マイヨールさん(左)は、与那国島で「あーあー」のなぞの発見をした。

体験学習施設整備を提案

OCVB

与那国海底遺跡活用で報告書

課題は宿泊施設

【那覇21日電】沖縄観光コンベンションビューロー（OCVB）は、与那国海底遺跡活用推進協議会（OCVH）の報告書「与那国海底遺跡活用推進協議会報告書」をまとめた。OCVHは、与那国島の観光資源を最大限に活用し、観光客の体験学習施設を整備することを提案している。報告書は、与那国島の観光資源を最大限に活用し、観光客の体験学習施設を整備することを提案している。

与那国の魅力、HPで発信へ



与那国海底遺跡活用で報告書。各種施設の整備を指摘

報告書は、与那国島の観光資源を最大限に活用し、観光客の体験学習施設を整備することを提案している。報告書は、与那国島の観光資源を最大限に活用し、観光客の体験学習施設を整備することを提案している。

「与那国島は世界遺産の域への入り口であり、その魅力を最大限に活用し、観光客の体験学習施設を整備することを提案している。報告書は、与那国島の観光資源を最大限に活用し、観光客の体験学習施設を整備することを提案している。

報告書は、与那国島の観光資源を最大限に活用し、観光客の体験学習施設を整備することを提案している。報告書は、与那国島の観光資源を最大限に活用し、観光客の体験学習施設を整備することを提案している。

観光振興やIT支援／県デジタルアーカイブ事業／公募開始、27日に説明会

県商工労働部は「沖縄デジタルアーカイブ整備事業」の公募を十六日から開始した。同事業は総予算十五億円をかけ、沖縄独自の風土、伝統文化、歴史などの資源を電子映像やデータ化して保存し、インターネットでの公開や大規模展示での活用などを通じて、観光振興などにも役立てるもの。二十七日午前十時から県庁講堂で公募説明会が開かれる。応募締め切りは六月二十五日。事業は県内のコンテンツ企業などIT関連企業の支援やIT関連の人材育成、沖縄関連のコンテンツの充実なども目指している。公募内容について二十二日、県庁で記者発表した県商工労働部の花城順孝部長は「本土企業も含めたJV(共同企業体)での応募の可能性もあるが、事業を通じて精緻(せいち)で上質の電子コンテンツ作りの技術移転や技術蓄積が県内企業でも進むことを期待している」と述べ、県内企業の積極的な応募を促している。デジタルアーカイブとは「電子書庫」の意。写真や動画映像なども含め、沖縄の文化、芸術、自然などをデジタル記録する。県では沖縄の自然のほか与那国の「海底遺跡、や世界遺産に登録された琉球グスク群など三部門の実写コンテンツ整備も事業の柱に据えている。公募の詳細は県庁のホームページで公開されている。

与那国の海底遺跡も決定

県のデジタルアーカイブ整備事業

【那覇】県が十五億円の

巨費を投じて本年度で進める「デジタルアーカイブ整備事業」で、大画面での上映を主とした大規模展示用コンテンツに与那国島の「海底遺跡」が選択された。同コンテンツは三つの部門があり、「沖縄の自然」と「城(ぐすく)群」のほか与那国の海底資源が沖縄観光の新たな魅力として加わった。

デジタルアーカイブとは

電子博物館のこと。沖縄の独自の風土、伝統文化、歴史などの資源を、デジタル技術を活用して整備し、沖縄地域の体系的な情報の発信と観光産業の振興、コンテンツ製作の人材育成、文化遺産の保存継承に役立てる。

内容は自然・歴史・美術工芸・芸能など二十七の項目をデジタルコンテンツにまとめ、インターネットなどで配信。また上映を主と

した大規模展示用コンテンツは奄美や大都市圏、観光

施設などで大画面を整備して放映する。

鑑賞や調べもの、ツアープラン作成、研究などを幅広く利用できるよう、高品質なコンテンツを制作する。

本年度で制作を終え、〇三年度から供用開始する予定。国十億円、県五億円の計十五億円の事業。

「海底遺跡説」批判 への反論

新嵩 喜八郎

(上)



出来た節理(ジョイント)に人間が手を加えた説などいろいろ

あらたけ・きはちろう 1
94年生まれ、68年ごろからダイビングを始め、現在タレントショップ経営

日紙面)と明言していた。自ら母那国に出掛け潜って調べたわけではなく、メディアで放送された映像や琉球大学調査団(団長

る。なぜその時潜水し自分の目で確認しなかったのだろうか。海底遺跡ポイントには内外問わず、各分野の研究者が大勢訪れているが、それぞれが実際に潜り自分の目で見て直接手で触つて、それぞれの専門的な立場からの説を唱えている。なかでも琉大調査団は何年にもわた

潜水調査なしの間接論

「印象的主張」との根拠は

な説がある。いずれの説に対しても、さまざまな意見や批判があり、そのことはよい事だと思

・木村政昭(琉大教授)などが提供した映像、見取り図、模型等を見ただけで、自分の目で確かめる事なく、遺跡説を批判している。考古学の専門家としてそれによいのだろうか。

り、データを蓄積しその結果に基づいて研究の成果を報告している。これらに対し、安里氏はいとも簡単に「印象的な主張に過ぎない」と連載(二十四日紙面)の中で書いている。真実解明の為に日々研究している研究者やサポートする調査団の調査に対し、どのような根拠でそのように断定するのだろうか。

安里調洋氏が四月二十二日から六回にわたり「沖縄タイムス」紙で連載した「母那国海底遺跡説批判」考古学の視点からは、読者に誤解を与えてしまつような点が多々あり、母那国海底遺跡ポイントを発見命名し、地元で観光に携わっている一人として反論したい。

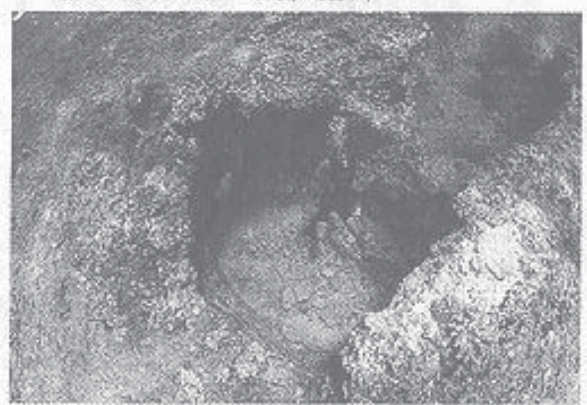
安里氏の論文は、氏が日本考古学協会会場で沖縄考古学界の第一人者であるだけに、読者に大きなインパクトを与えたと思

安里氏は昨年、日本本中考古学の大先輩である黄勇氏、翻訳家の大地隆氏と母那国島を訪れた時、海底遺跡ポイントの場所を船上から見たと聞いてい

る。なぜその時潜水し自分の目で確認しなかったのだろうか。海底遺跡ポイントには内外問わず、各分野の研究者が大勢訪れているが、それぞれが実際に潜り自分の目で見て直接手で触つて、それぞれの専門的な立場からの説を唱えている。なかでも琉大調査団は何年にもわた



海底遺跡ポイントを調査する世界的なフリーダイバーの故ジャック・マイヨール氏=1997年



海底にある井戸。二つにつながっている(いずれも新嵩氏撮影)

安里氏は「木村氏らは、当初は、母那国海底「遺跡」に付着したサンゴ類による年代測定値などを参考にして遺跡の年代を約四千年から二千四百年前と推定している(二十五日紙面)木村氏は最近の著作で「二万年以上前」だと考えを変えてきた(二十三日紙面)と批判してい

るが、木村氏は遺跡ポイントに何年も時間を費やし何回も潜水し、サンゴ類や岩盤に付着しているサンゴ化石を数十カ所からサンプリングし、放射性炭素年代測定法で年代を測定している。研究・検証を重ねて、その結果の報告だから最新の結果を発表する事は年代をすりかえる

ことにはならないと思う。安里氏は、海底遺跡のような巨大な建造物が人工だとすれば、それは新石器時代以降の新しい時代の定住社会にしかなじまない二万年説に對しても批判している。時代はどちらだったら良いのだろうか。(母那国町観光協会副会長)

「海底遺跡説」批判 への反論

新島 喜八郎

(下)

安里副淳氏は「与那国島や先島諸島の先史時代には巨石を加工する文化はない。…(その後の時代の加工も)『遺跡』とは時代も文化系統も内容も関連しない」(沖縄タイムス紙四月二十六日付紙面)と断定しているが、論拠は不明り

遺跡につながる遺物はないかと調査中、与那国南側に位置する海底遺跡ポイント近くの比川集落・ウバマ浜手前海岸へりで見つけた。それは加工痕のある石で、私たちはクサビ石と呼んでいる。このように、例えば与那国にある細

前、台湾から来た石工が割つてしまった。また、海岸では、立神岩北西側の切り立った階層の高さ三、五メートルの壁面に人間でなくては彫られない二重丸が真横に四つ並んでいる。このように加工痕のある石が与那国にはほかにも存

巨石文化の痕跡多い

論拠不明りような安里論

世界には、本当に不思議な構造物や、何でもな所と思われぬ遺物が発見されている。日本のある所にあたる南米エクアドルには数千年前の日本の縄文式土器に似た土器が出土していることは、知っていることと思つ。

よつだ。さらに、安里氏は砂岩を「クサビ穴のある石製水タング制作前の砂岩」(二十九日紙面)と紹介しているが、何を根拠に石製水タングとしたのだろうか。

また、巨石文化とは関係ないだろうか。ほかに、八十年ほど前、祖納集落から比川集落に入る丘越えの道の坡上に船の絵が彫られた巨石があった。調査団は比川集落の住民に聞き取り調査で確認している。残念ながら護岸工事のため、六十年

在する。これも、巨石文化と何らかの関係があるのではないかと私は考える。このように、与那国には巨石文化とつながりがあると考えられる遺跡や物が存在するのである。

最後に、トゥグル浜遺跡は安里氏が報告書で「与那国における初の石器時代の遺跡の

確認であり、与那国における石器時代の遺跡の発見の意義は大きい」としている。その貴重な遺跡の近くで最近、新たに目撃された遺物の発見があり報道された。

今またどんどん出てきているこれらの貴重な遺跡。今からでも遅くないので、よく調べてトゥグル浜遺跡と同様に大事な文化財を守ってほしい。安里氏は他の研究者同様、与那国に来て

地上、海岸、海上、海中を見て触つて、そしていま一度沖縄タイムス紙面で批判される事を望みたい。来島のおりには私が案内したい。

(与那国町観光協会筆頭副会長)



海底遺跡を調査するボストン大学のロバート・ショック博士(1998年)



クサビ穴のある石製水タングのクサビ石 (いずれも新島氏撮影)

学生と話す毛利さん(左から2人目)と木村教授(左)＝琉球大学



毛利さん今度は海底へ

宇宙飛行士の毛利衛さんが三日、船長を務める日本科学未来館(東京)で放映するビデオ制作のため、与那国町の海底遺跡を研究する琉球大学の木村政昭教授を訪ねた。予定していた与那国海中でのビデオ撮影は台風で中止になったが、木村教授から説明を受けた毛利さんは「自然界にはない、人工物だと自分の自

遺跡取材に夢ふくらむ

木村教授と懇談 9月に潜水

「確かめたい」と遺跡への夢をふくらませた。ビデオ「海は生きていく(仮称)」は、調査が進んでいない水深四〇―二〇〇層の世界に人間の生活していた痕跡を探る内容。「定説」を紹介してきた従来の博物館と異なり、現在進行形の学問を紹介する狙いもある。数カ月前に海底遺跡を知ったという毛利さんには放映されるという。

「石でできたメキシコの神殿を想像する。海底に沈んだ文明が、世界にはもつとあるかもしれない」と期待。木村教授は「二万年前は現在より海面が低かった。与那国が特殊にみえるかもしれないが、珍しくはないかもしれない」と応じた。回廊によると、毛利さんは現地でビデオ撮影のため九月初めに再び来県、木村教授とともに海中に潜る予定だ。

青く漂う巨大な神殿

日本最西端の沖縄県与那国島沖の海底に、ピラミッドのような巨大な石の「遺跡」がある。古代の人類が巨岩を使って築いた高度な文明の痕跡と唱える声が高まる一方で、自然が生んだ複雑な地形に過ぎないと主張する人もいる。「ムー大陸」の一部との説も呼び起こすミステリアスな海底をのぞいてみた。

与那国島 潜ってみました

なぜ不思議ミステリー

■ 85年に発見
 沖縄地方が梅雨入りした直後の5月12日、与那国島の「海底遺跡」を訪れた。グラスボートに乗る、島南側の1000メートルの沖のポイントへ。水中メガネとシュノーケル、足ひれをつけて、波の高い海に飛び込んだ。

潜ってすぐ、目の前に巨大な岩盤が見えた。周りを魚の群れが泳いでいる。よく見ると、岩の端はまっすぐで、まるで石切り場のような。さらに、階段のような段差が水底に続いていた。

1985年(85)の場所を見つけた与那国町観光協会企画部長の新島宮



与那国島の「海底遺跡」(写真集「与那国島〜海底のロマンス〜」から)＝(株)美峰提供



「ここから、」と刻まれた石器や、牛をかたどったようなシリフ像もみつかった。この2点も昨年、ウイーンの博物館で集めた石を放射

海底遺跡 海底にある遺跡で、都道府県の認定があれば文化財保護法の適用を受けられる。ただ、埋蔵文化財とみなされなかったり、水中での調査に特殊な技術が必要だったりするため、実際には保護対象にならない面がある。文化庁によると今年度、調査に国の補助金が出ているのは長崎県の鹿島海底遺跡だけ。一方、ユネスコは昨年11月、「1000年以上水中にあった文化的、歴史的、考古学的な人間存在の痕跡」を幅広く保護の対象とする「水中文化遺産保護条約」を採択した。世界的に水中の文化遺産を守るという機運は高まりつつある。

文明の跡？自然の造形？

八郎さん(55)は「ピラミッドのようだった」と振り返る。遺跡かもしれないと考へ、「遺跡ポイント」と名付けた。ダイバトとして世界的に知られる故ジャック・マイヨール氏もここに潜り、「古代文明の存在を実感させ

る」と称賛した。

■ 1万年前？
 詳しく調査したのは、地質学を専門とする琉球大学理学部の木村政昭教授だ。07年3月、「琉球弧地殻変動の研究―遺跡ル氏もここに潜り、」と題した論文を発表した。

八郎さん(55)は「ピラミッドのようだった」と振り返る。遺跡かもしれないと考へ、「遺跡ポイント」と名付けた。ダイバトとして世界的に知られる故ジャック・マイヨール氏もここに潜り、「古代文明の存在を実感させる部分を用意していた。ある、などの理由で、人

木村教授は、①岩の切断面に人手によるとみられるクサビ状の穴がある②長さ100メートルの城壁のような「石垣」は一般的な石組み工法で造られたとみられる③周囲に道路や排水溝のような部分がある、などの理由で、人

■ 観光資源に
 だが、沖縄県の考古学界は遺跡との見方を全面否定している。異埋蔵文化財センターの安里樹蔵センター長は4月下旬、地元紙の沖縄タイムスに「与那国海底遺跡説批判」と題して6回の連載をした。与那国島を含む沖縄県の八重山地方には巨石文化が存在しないこと

とや、こうした地形が自然にもできることを根拠に、海底遺跡説を「印象的な主張」と断じた。ただ、安里氏は「遺跡付近の海岸の観察をしただけで、実際に潜ってみたことはない」としている。木村教授は「証拠も無く否定され心外だが、それ以上に、遺跡でないからといって県などが十分な保護策を講じていないことが心配だ」と話す。

観光資源としての「海底遺跡」への注目度は高まっている。3月半ば、県は「海底遺跡」の活用を考へるシンポジウムを観光団体などと共催。自然の地形が遺跡かを問わずに保護策を講じようとしており、与那国町も条例づくりに取り組む始めた。

文部科学省の外郭団体が運営する日本科学未来館はこの秋、「海底遺跡」を題材に20分余りの映像作品を作り、今年中に同館で上映を始める。島でグラスボート運航している佐々木孝義さんの(52)は6月、38人乗りの高速船を新調した。「このままに包まれている方が神秘的で、観光客を引き寄せるんじゃないか」と本格的なブームに期待している。

(社会部 望月洋樹)

デジタルアーカイブ／県、32件を採択／来年1月の完成目指す

県商工労働部は十一日、沖縄デジタルアーカイブ整備事業の制作実施者公募採択結果を発表した。二百件の応募の中から、首里城（代表企業・国建）、グスクおよび関連遺産群（同・琉球放送）、空手・古武術（同・琉球新報）など三十二件が採択された。週明けにも、コンソーシアム（企業連合体）でコンテンツ制作を開始し、来年一月完成を目指す。同事業は、県が国庫補助で総額十五億円の予算をかけ、沖縄独自の風土、自然などの資源を、電子映像・音声化し保存、インターネットなどで公開、活用を図るもの。観光振興への貢献と同時に、県内のコンテンツ産業の振興や人材育成なども目指している。監修委員会委員長の武邑光裕・東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授は「総じて提案内容のレベルは高く、非常に厳しい競争の中で採択された」と総評した

与那国海底遺跡説の

新高氏への回答

安里 嗣淳

〈上〉



えまい。

なお、私は与那国島に四カ月滞在して発掘調査をしたことがあり、その間に類似地形である「サンニ又台」を詳しく観察した。その後も三回海底「遺跡」付近の地形観察に赴いた。

ところで、昨年末に茂在直男、大地勝氏らと与那国に行つた時、船上から見ているがらな

物は全く知らない。こういうことは確かな情報に基づいて発言しないと、相手を傷つけることもあるので、気をつけたいものである。

「遺跡説は印象的な主張に過ぎない」とする私の批判に対して、「何年にもわたり、データを蓄積しその結果に基づいて研究の成果を報告している」の

に、「どのような根拠でそのように断定するのだろうか」と反論されているが、さきに本紙で六回にわたって根拠をあげて証

印象的な主張というべきである。調査に内外から大勢訪れている、自分の目で見て触っている、何年にもわたる調査である、というような新高氏の言説こそが情緒的であり、印象的なのである。私はいとも簡単に「そう言っているのではない。」

木村氏が当初、「遺跡」の年代を約四千年前から二千四百年前と推定していたが、その後一万年以上前だと考えを変えてきたことについて、私がこれを批判したとしているが、拙文をよく読んでいただきたい。「考えを変えてきた」と、事実経過を紹介しているだけで、批判をしているのはその新しい考えの内容に対してである。ただし、木村氏が旧説をどう整理したのかについて触れていないのは残念だと思つている。

(日本考古学協会会員)

現地調査せず研究可能

ことはなくても、調査報告書などを情報源にして、考古学の研究をすることもある。ほとんど

の考古学研究者も同様の研究方法をとることがある。今や日本の年間発掘件数は数千件に及び、自ら現地調査にかかわるのは時間的、経済的に不可能なのだから「それでよい」のである。研究者のすべてが蓄れるわけではないからこそ、遺跡説の主張者たちはそういう人たちにも

詳細な観察記録提示を

のである。自分の遺跡説には使えて、批判を受けると、「実際に潜らないとわからない」ように提示の仕方では学問的とはい

せ潜らなかつたかと問うている。まことに迷惑な話だが、私は昨年与那国に行ったことはな

い上に茂在氏とは約二十年前に会ったきりだし、大地氏なる人

明した通りである。木村政昭氏(琉大教授)らは、私が指摘したような否定的な資料がありながら、それを検証することなく、それでも遺跡だとするのは

私が「与那国海底遺跡説」を批判したことに対して、拙文をお読みいただき、去る六月二十六、二十七日の本紙朝刊に感想を寄せられた新高喜八郎氏に感謝しあげるとともに、ここに回答しておきたい。

まず、私が「実際に潜ってみたことはない」のに、「自分の目で確かめる事なく、遺跡説を批判することは、考古学の専門家として、それでよいのだろうか」との指摘である。私は琉球列島や東南アジアの遺跡・遺物について、「自分でその遺跡を発掘したり、見学したりした

与那国海底遺跡説の

新高氏への回答

安里 嗣淳

〈下〉

実は先の拙文は昨年の七月に寄稿したのだが、その後、木村政昭氏（琉大教授）はまたも年代を変更している。今度は約六千年前頃といふのである。木村氏は与那国島トゥクル浜遺跡の年代が、従来いわれている二千年前ではなく、四千四百年前の測定値を得たことも根拠にしている。つまり、与那国最古の新石器時代遺跡の年代が二千年余も古くなったのだから、もっと古い時期の遺跡もありうるのではないかということである。私もその可能性はあると思う。しかし、海底遺跡が真に遺跡かどうか」といふことは、論

確認できぬ海水面変動

巨石加工、水タンクが主

国において確認されない以上、もはやどの時代にも存在し得ない。私が「与那国島や先島諸島の先史時代には巨石を加工する文化はない」その後の時代の加工も「遺跡」とは時代も文化系統も内容も関連しない」とする指摘を「論議は不明瞭だ」と反論している。新高氏にはぜひとも再読して頂きたい。私は批判に考古学研究成果に立つて発言しているのも、もっと詳細に知りたいのであれば参考文献をご紹介したいとしかいえない。また、与那国の南海岸にあるクサビ穴のある巨大岩塊を「石製水タンク」とした私の指摘の根拠を問うているが、先の拙文で概観したように、与那国島における巨石加工文化は近世を中心とする村跡までしか遡れず、しかもそれは水タンクが主であ

心とする村跡までしか遡れず、しかもそれは水タンクが主であ

は、新高氏が「反論」と題しながら、先の私の批判で指摘した海水面変動、巨石文化の発生と展開、人工とした場合の人間社会の準み出す建造物の諸特性との矛盾、周辺地域の巨石文化との比較、旧石器時代の特徴との矛盾などにまつたく触れていないからである。このように私の批判の重大な部分に答ええない言説は「反論」とはいえないので「感想」と受けとめておきたい。私は新高氏の問いに対して逐一回答したつもりである。

トゥクル浜遺跡の年代、つまり約四千年前以降は海水面に大きな変動はないことがわかったとされており、自ら最初の説が成り立たないことを実証されたのである。新高氏は「時代はどちらだったら良いのだろうか」と言われるが、先の拙文で指摘したとおり、二十層にもおよぶ海水面の相対的変動が新石器時代以降の与那

あたって、海底「遺跡」の特徴をまず指摘したはずである。そして、その特徴をふまえるながら、遺跡名や地域名を挙げて八重山・宮古諸島から台湾、フィリピン、東南アジアの巨石文化を検討している。紙数の都合で十分とはいえないが、現時点の

る。したがって私の推定は、より身近な具体例と照合しているものであり、きわめて自然な推定だと考えている。さて、以上は新高氏が「反論」と題して指摘されたことへの回答である。ここに「新高氏への反論」とせず「回答」としたの

は、いずれあがりたくお受けしたい。なお、私は年末までは多忙なので、再反論があった場合の再回答は来年になることをご了承願いたい。新高氏が拙文に反応してくださったことを、あらためて感謝する次第である。
（日本考古学協会会員）

与那国再訪の
おりに、新高
氏がご案内くだ
さるとの厚意